

抄 録

結核専門雑誌

Beiträge zur Klinik der Tuberkulose. Bd. 81, H. 5, 1932.

結核ニ對スル細菌學的及ヒ組織學的検査

Kurt Broch: Bakteriologische und histologische Untersuchung über die Tuberkulose.

結核菌血症 (Tuberkelfacillämie) ノ問題ニ關シテハ生體流血、屍體血液、脾臟、骨髓及ヒ肝臓ノ諸検査ヲ要スト唱ヘ、然シテ著者ハ即チ、Löwenstein 氏法ニ依ル検査ノ結果次ノ通り報告シテキル。即チ、130 例中肉眼的 1 例、檢鏡的 3 例ノ陽性ヲ示セリ。尙 130 例中 14 例ニ就キ屍體ノ右心室ノ血液ヲ検査セルニ唯急性粟粒結核ノ 1 例ノミ陽性ニシテ他ハ全部陰性ナリシト。又 130 例中慢性肺結核ノ 9 例ニ就キテハ血液検査ノ他ニ脾臟及ヒ骨髓検査ヲナシ結核菌血症ノ疑ヒアルモノニハ組織學的及ヒ細菌學的検査ヲナシタ。

慢性肺結核ノ 38 例ニ於テハ脾臟及ヒ骨髓ニ關シテ 40 例ニ就テハ、肝臟及ヒ脾臟ニ關シテ調査セリ、此ノ際ニ於ケル肝臟ノ感染關係ハ腸結核ニ係ルモノナリシト。以上諸検査ノ結果ヨリシテ持續的菌血症ハ之レヲ認メ得ザリシモ多クノ場合推移性ニ起リ氣付カズニ經過スルモノナラント云ヘリ、尚、血液ノ菌浮游ノ證明ハ丁度偶然ニ的中スルカ又ハ死後ノ組織的或ハ細菌學的檢索ニ依ルモノナラント云ヘリ。 (相澤抄)

小兒血液中ニ於ケル結核菌ノ證明ニ就テ

Josef Siegl: Über den Tuberkelbacillen nachweis im Blute von Kindern.

140 名ノ小兒血液中ノ結核菌ニ就キ Löwenstein 及ヒ Maresch ノ研究室ニ於ケル培養並ビニ動物試験トヲ並行シテ検査セル結果ヲ報告シテキル、而シテソノ種別ハ活動性結核ヲ有スルモノ、非活動性ノモノ及ヒ「ツベルクリン」陰性者ニ就イテ實驗セリ。

大體ノ結果ハ Löwenstein 研究室テ培養セル方が陽性率高ク活動性結核患兒ハ 13.5% 非活動性 18.9% 而シテ「ツベルクリン」陰性兒ニ 23.9% ノ陽性結果ヲ示シテキル、而シテ此ノ「ツベルクリン」陰性兒ハ主トシ

テ「ロイマチス」疾患ヲ有スルモノナリシト。而シテ Maresch 研究所ニ於ケル「ツベルクリン」陰性兒ハ何レモ陽性ノ結果ヲ示シテキナイ。而シテ結核菌血症ト「ロイマチス」トノ關係ニ就テハ見解ハ疑問デアラウトシテキル。 (相澤抄)

結核感染能力ニ關スル疑義ニ就キテ

Richard Priesel: Zur Frage der Austeckungsfähigkeit der Tuberkulose

結核病原者ガ其ノ周邊ニ及ヒス感染能力ノ疑義ニ關シテ 4 例ヲ擧ゲテ説明報告セルモノナリ。

第 1 例、7 年 6 月ノ糖尿病患兒ニシテ、1931 年 3 月 16 日ニハ「ツベルクリン」陰性ナリシモノニテ同年 4 月 28 日ニハ「ツベルクリン」陽性ニテ 10 月位、結核性初期熱ヲ呈セルモノニシテ其ノ後 4 月ニテ熱上昇及ビ右側結核性肋膜炎ヲ起シ治癒シ赤血球沈降反應モ正常ニ復セリ然シテ、胃内容洗滌物検査ニヨル結核菌證明モ陰性ナリシモノニテ即チ經過中傳染性ヲ有シナカツタ。

第 2 例、6 年 5 月ノ開放性結核兒童ノ場合ニシテ主トシテ微毒性ノ所見ヲ主トセルモ、「ツベルクリン」反應ハ陽性ニシテ其ノ後結核菌ヲ證明セルモノナリ然シテ、其ノ母及ビ兄弟 4 人ハ幼兒ニ肺結核ニテ死亡セルモノニテ此ノ兒童ニ 17 日間同居セル「ツベルクリン」陰性ノ 9 年ノ兒童ヘノ結核感染有無ノ検査ハ遂ニ陰性ニシテ其ノ後 2 月後ニ至ツテモ尙「ツベルクリン」反應ハ陰性ヲ示セリ。

第 3 例、2 歳ノ「ツベルクリン」陰性兒ガ突然陽性轉化ヲ來セルモノニ關スル考察ニシテ初メハ近隣ノ 3 歳ノ腺病質ノ兒童ガ傳染源ラシク考ヘラレタガ實ハ其ノ腺病質ノ兒童ノ母ガ重症結核患者ナリシモノニテ且其ノ後引續イテ此ノ女性ヨリ同室ノ 9 歳及ビ 3 歳 8 月ノ兒童及ビ自身ノ第二兒ノ 1 歳 9 月ノ兒童ニ新ラシク感染セシメタル場合ニテ實際他ニ傳染

源ノ存在セル誤リ易キ場合ヲ述ベタリ。

第 4 例、急性氣管枝腺結核ノ場合ニテ肺像所見カ陰性ナルトキハ感染性デハナイト述ベテキル。(相澤抄)

實驗的結核ニ於ケル過性免疫現象ニ就テ

E. Brudnick: Über das Zeitliche Auftreten der Immunitätserscheinungen bei experimenteller Tuberkulose.

(Stamm Nr. 6458-Stolzalpe. Müller Erich)ノ Stamm 1:10000 結核菌浮遊液ヲ體重 300—800 ノ海狸 37 匹ニ亂切法ニ依リ實驗シタル試驗ノ結果ヲマトメテ次ノ如ク報告シテキル。

(1) 初感染後 1 日ニシテ起ツタ再感染ハ試驗動物ニ際シテハ初感染ト同様ニ經過スル。

再感染罹患成立トソレニ屬スル淋巴腺ノ腫脹ニ於ケル差異ハ證明シナカツタ。

(2) 初感染後 3 日目ニ於ケル再感染ハ免疫ノ最少ノ度ヲ示シタ、免疫ハ亂切部位ニ於テ比較的小サナ再感染罹患ノ成立ヲ示サズ却ツテ多クハ局所ノ淋巴腺腫脹ヲ示シタ。

(3) 初感染後 4 日目ノ再感染ハ亂切部位ニ比較的小サナ變化及淋巴腺ノ輕度ノ腫脹ヲ來シタ。

(4) 初感染後 5 日目ノ再感染ハ第 3—述ベタルモノニ似テ居タ。

(5) 再感染ノ際ノ免疫ハ初感染後第 4 日目に於テ既ニ證明セラレタ且兩者ノ時間が大ナレバ大ナル程強ク出タ。

(6) 著者ノ試驗ノ結果免疫ノ成立ハ第 4—第 6 日目に出現セリト然シテ此ノ時期ノ證明ハ先ノ Hamburg 氏ノ結果ニ依リテモ補ハル即チ Hamburg 氏及其ノ協力者ニ依レバ既ニ感染セル動物ニ於テ Tuberkulinallergie ヲ第 5—第 6 日目に證明シテキル。

然シテ著者ハ再感染ニ對スル免疫ハ海狸ニ於テハ初期變化群ノ成立多數日前ニ既ニ出來テキルト云ヒ此ノ事ハ人體ノ結核病理ニ對シテモ有意義ナラント述ベタリ。(相澤抄)

結核ノ變質療法ニ就テ

F. Mattauch: Zur Umstimmungsbehandlung der Lungentuberkulose.

變質劑トシテノ Disulphamin 試用試驗ノ結果報告ニシテ主トシテ亞急性推移期ニアル慢性肺結核患者ニ於テハ弛張セル微熱又ハ輕度ノ熱性熱ヲ少クモ 3—4 週間示セル 82 例ノ内數週間經口的 Disulphamin 療

法ニ依ツテ下熱セルモノ 85 % ナリシト、此ノ際使用量ノ間隔ハ Körniger 氏ニ從ヘル治療方法ハ最良ノ結果ヲ來タセリ。

尙ホ下熱作用ノミナラズ之ニ依ツテ全植物性神經群ノ變質ノ影響ヲ觀察スル事ヲ得。

即チ肺結核ノ變質治療ノ内ニ於テ Disulphamin ノ經口的療法ハ準備的又全變質ヲ來ス療法ニシテ且之レガ保護ノ役目ヲモナスモノナリト。(相澤抄)

人工氣胸ニ於ケル壓力計ノ奇異的現象ニ就テ

Emerich Schill: Über paradoxe Manometerausschläge bei Künstlichem Pneumothorax.

人工氣胸ニ於ケル後補充(Nachfüllung)ニ際シテ穿刺針ノ正常位ナルニカ、ワラズ表ハレタル壓力計ノ異變ニ就キ 2 例ヲ擧ゲテ説明セリ、而シテ是等ハ何レモ位隔膜附近ニ氣泡形成ノ成立セルモノナリ。

(相澤抄)

片側ノ空洞性過程ニ際シテ横隔膜神經捻除術法ヲ無條件ニ推擧シ得ルカ

G. E. Patronikola: Kann man die Phrenicusexairrese als Methode der Wahl bei einseitigen Kavernösen Prozessen bedingungslos empfehlen?

著者ハ結論トシテ次ノ如ク主張シテキル。即チ本法ニ多大ノ期待ハ望ミ得ナイガ人工氣胸療法等ヲ施行シ得ザルモノ或ハ直ニ Plombe 又ハ Thorakoplastik ノ如キ大手術ノ出來兼ナル時及ビ他側ニアマリ病勢ノ進行セヌ場合ニ初メテ行フベキ方法ニシテ、尙本法施術後 4 ヶ月ニシテ未ダ其ノ效果ヲ擧ゲ得ザル時ニ他ノ適宜ノ手術方法ニ依ルベキダトセリ。

(相澤抄)

選擇氣胸ニ於ケル胸部聽診所見

Gudehus: Thorakoskopiebefunde beim Selektivpneumothorax.

Thorakoskopie ヲ行ツタ 65 名ノ患者中「レントゲン」検査ニ依リ著明ナル選擇氣胸ヲ形成セル 19 例ニ就キ詳細ナル觀察ヲナシ内 7 例ニ就キ結果ヲ報告セルモノナリ。

而シテ此ノ 7 例ノ觀察結果ヨリシテ著者ハ選擇氣胸形成上ノ諸種ノ原因成因ニ就キ見解ヲ得タト云ツテキル。

即チ著者ハ之レヲ次ノ二組ニ分ケテ觀察シテキル。

第一組。肺上葉ト下葉トノ著シイ癒著ノナイ場合ニシテ葉間膜ノ直接接近セル所ニテ下葉ノ最上位ヨリ

索狀結合ノ側胸壁ニ癒著セルモノニテ、此ノ索狀結合ハ上葉ノ虛脱ニ影響ナク下葉ヲ牽引セリ。

第二組、肺上葉ト下葉トガ葉間隙ニ於テ明ニ互ニ癒著シテキル葉間隙ヨリ直接索狀絲ガ胸壁ニ癒著牽引セルモノテ完全ナル虛脱ヲ防害セリ。

而シテ是等索狀部ノ切斷工作ノ結果ハ兩組トモ何レモ良果ヲ得テ完全ニ虛脱セシメ得ルニ至ツタ。

(相澤抄)

横隔膜神經捻除術後ニ他側ニ起レル濕性肋膜炎ノ一例

H. E. Symens: Ein Fall von Pleuritis exsudativa der Gegenseite nach Phronicoexairese.

右側ノ横隔膜神經捻除術施行後左側ニ濕性肋膜炎ヲ併發セル1例ニ就キ最初ヨリノ詳細ナル病歴ヲ掲ゲテ其ノ經過ヲ報告セルモノニシテ尙、「ツベルクリン」療法ヲ併用セルモノナリ初期ノ危懼セル症狀モ3ケ年間ノ觀察ニ依リ良果ヲ得タリト述ベタリ。(相澤抄)

打診聽診ニ依ル音響的肺診斷法

Emmerich Weidlinger: Die Schallhöhe vergleichende Perkussions-Auskultation in der Lungendiagnostik.

胸骨板ノ中央ニ聽診器(Phonendoskop evtl. Stethoskop)ヲ當テ兩鎖骨ヲ同様ニ打診シテ其ノ音響ヲ比較聽診スル方法ニテ、此ノ結果、兩肺ノ理學的狀態ノ差異ヲ診斷シ得片側ノ浸潤ノ存在ヤ小サキ不明ナル側ノ空洞等ヲ證明シ得ルト云フ。(相澤抄)

照射セル「レチチン」及ビ然ラザルモノトノ肺結核ニ對スル意義ニ就テ

H. Siems: Über die Bedeutung von bestrahltem und unbestrahltem Lecithin für die Lungentuberkulose.

2%ノLecithin 20ccヲHanauer石英燈ニテ50cmノ距離ニテ照射シ、其ノ照射時間ヲ4、8、16、32分、又ハ6、12、24、45分等ニ行ヒタルモノ及ビ同%ニテ照射セルモノト否ザルモノトニ分ケ、照射シタルモノハ何レモ24時間後ノモノヲ夫々、下膊ノ手掌側面ニ皮内注射ヲ行ヒ其ノ反應ノ結果ヲ反應程度ト上記ノ各種類トノ間ニ於ケル關係ヲ圖示シテ説明セリ。即チ次ノ二群ニ分ケテ觀察シテキル。

(A)次ノI-IV例ニ於ケル結核性患者23名。

(I)反應最著明ニシテ且否照射ノモノトノ差大ナルモノ8例、

(II)反應著明ニシテ否照射ノモノトノ差著明ニシテ(I)ト比ブルニ照射ガ永クテモ反應ノ變ラヌモノ7例、

(III)以上兩者ニ屬シ反應ノ差著明ノモノ4例、

(IV)照射ニ依リテ變化ナキモノ4例、

即チ以上23例ノ患者中19例ガ照射ニ依リ反應強調セリ。

(B)無熱ニシテ結核性疾患ニ非ザル16名ノ患者。

(I)照射ニ依リ強調セルモノ7例。

Aノ(I)ニ依テキルガソレ程強度ナラズ殊ニ短時間ノ照射ノ結果強調セリ。

(II)反應度弱ク且照射ヲ影響ナキモノ9例、

即チ16例中7例ガ照射ノ影響ヲ受クタレドモ結核患者ヨリ反應ノ強サ弱ク及期間ガ短カイ。

尙他ニ6例ノ健康人ニ施行セル結果ハ一時間半迄照射セルモノヲ用ヒタレドモ一致シタ變化ヲ見ザリシト。(相澤抄)

Bohnerwachs-Bakteriol Morsanノ殺菌力ノ培養的追試

R. Brinkmann: Kulturelle Nachprüfung der bacillennabtötenden Kraft der Bohnerwachse „Bakteriol“ und „Morsan“

Bohnerwachs, Bakteriöl, Morsanヲ夫々結核菌ニ對スル殺菌力ノ點ニ就キ培養的ニ追試シテ著者ハ尙不満足ナル點多シト結論セリ。(相澤抄)

喉頭照射用冷石英燈

Hugo Kraus: Eine kalte Quarzlampe für Kehlkopfbestrahlung.

喉頭結核ノ紫外線療法器トシテ在來ノモノハ加熱シ易ク使用上諸種ノ不便ヲ伴ヒタルモノ今次、奧大利ノ石英工場製ニシテWienノElektrosol合資會社カラ販賣セラレタル冷石英燈ハGlimmlichtノ原則ニ依リ皮膚及ビ粘膜ニ直接長時間アテ、モ差支ヘナイ位ノ熱度シカ出サナイ使用上有利ナルモノナリト其ノ使用方法等ヲ詳述セリ。(相澤抄)

E. Altstaedt, Der Lübecker Tuberkuloseprozess und die Gutachten der Sachverständigen.

著者が4月26日、28日及び其後ニ抑留サレテ、刑法上ノ非難ハ受ケナカツタガ、裁判所テハ二ツノ非難ヲ擧ゲ、其レニヨツテ著者ヲ有罪ニセント考ヘテル。即チ其非難ノ一ハ、著者が此實驗ノ代表者トシテ、Deyckeガ研究室ノ處理ニ關シ、Calmetteノ推舉シタ通りニ行ツタカドウカラ監督シナカツカカラ有罪デアルトシテル。

之ニ對スル著者ノ辯明ハ、衛生局ハ自分ニ統率ヲ命ジ、Deyckeニ接種菌ノ製造ヲ委任シタ。即チDeyckeハ此目的ノ爲ニ官ヨリ選抜サレタ權威デアアル。其故ニ自分ハ衛生技師トシテモ學者トシテモ、彼ヲ監督スル事ハ出來ヌ。衛生技師ハDeyckeノ上官テハナイ。DeyckeハSenatorヲ有スル他ノ役所ニ屬シテルノデアアル。尙其他二三ノ項目ヲ擧ゲテ辯明シテル。

次ニ他ノ一ハ接種實驗ノ前及ビ其最中ニ於テ、BCG氏菌株ノ純粹ナル事ヲ動物實驗テ試験シテ見ナカツタカラ有罪デアルトシテル。

著者ハ之ニ對シ、此非難モ當ラナイトシテキル。専門家ハCalmetteノ培養菌ヲ動物實驗テ試験シナカツタ事ハ、細菌學技術ノ規則ニ違反スルモノテハナイト徹底徹底主張シテル。衛生局ガ接種菌ヲ請求シタ時ハ、BCGハ權威者ノ下ニ在ル研究所テ細菌ヲノ法則ニヨリ製作レタノテ、純粹デアルト見做サレル。鑑定人ガ其意見ノ中述ベテル如ク、此不幸事ガ細菌學専門家ノ技術上ノ失敗トスルナラバ、衛生技師ハ斯ル事故ニ對シテ責任ヲ持ツ事ハ出來ヌ。夫故ニ結局ハ著者ヲ有罪ナラシメル此非難ガ、正シイカドウカノ判斷ハ、單ニ衛生局ノ顧問ニ過ギナイトコロノLübeck上席衛生官ノ權限ヲ如何ニ判定スルカニ存スル。

以上ノ説明ハ鑑定人ノ意見ニ對スル參考トシテ必要デアアル。而テ自分ヲ有罪トスル事ハ不可解ノ事デアルト述ベテ居ル。

(中田抄)

肺結核症ニ於ケル全身感染表現トシテノ結核菌尿

H. Deist: Tuberkelbarillurie als Ausdruck der Allgemeininfektion bei Lungentuberkulose.

結核性腎臟炎ヲ持タナイ結核症ノ場合ニ、結核菌ガ何ノ位ノ頻度テ尿中ニ現レテ來ルカノ實驗ハ、時々文獻ニ表ハレルガ其成績ハ一致シテナイ。

著者ハ家兔ヲ選ビ、或ハ人型或ハ牛型ノ結核菌ヲ其

靜脈内ニ注射シタ。其尿ヲ集メ、之ヲ天竺鼠(Meerschweinchen)ノ後脚ノ皮下ニ注射シタ、各家兔ノ尿ヲ二匹ノ天竺鼠ニ注射シタ。

尿ハ先ヅ硝子綿テ次テ綿テ濾過シ、10%ノ硫酸ヲ加ヘテ15分間放置シ、次テ遠心沈澱サセル。更ニ此沈澱ヲ生理的食鹽水テ2回洗ヒ、酸性反應ヲ弱メル。斯様ニスルト天竺鼠ノ接種部ニ壞死ヲ起サヌ。

此實驗ハ2年餘ニ互リ行ツタ。其成績ハ11匹ノ家兔ノ尿ヲ105匹ノ天竺鼠ニ接種シ、此105匹ノ天竺鼠ノ内、31匹ガ或ハ結核症ヲ自然ニ死ニ(11匹)、或ハ解剖上明カニ結核症ガ證明サレタ。

5匹ノ家兔ハ前以テUrannitrat溶液テ處理シ、腎臟炎ニ相當スル尿ノ變化ガ顯著ニアラハレテカラ結核菌ヲ靜脈内ニ接種シタ。

家兔ノ解剖ニ際シ、腎臟ガ結核症ニ罹ツテルカドウカハ興味ノ中心デアツテ、腎臟結核ノ有無ノ證明ガ家兔尿ニヨリテ生ズル天竺鼠結核症ノ判定ニ絶對的必要ナモノデアアル、ソコテ著者ノ實驗ヲ見ルニ、實驗ニ供サレタ總テノ家兔ノ腎臟ハ結核ニ罹ツテナカツタ。以上ノ實驗及ビ人間ニ於ケル成績カラシテ、腎臟外結核症ノ場合、腎臟ガ局所的疾患ヲ起サズシテ、結核菌ヲ通過サセルト云フ事實ハ、最早ヤ疑ヒナキトコロデアアル。

結核菌ノ増殖ハ、多クノ場合適度ノ限界内ニ行ハレ、其排出ハ短時間ニ行ハレル。

結核菌ノ證明ヲ以テ、泌尿生殖器ノ結核症ノ存在ヲ決定セントスルLenhartz(1910)ノ古キ考察ハ、最早ヤ維持サレナイ。多クノ場合外科的手術ヲ要スル腎臟結核ノ證明ニハ、結核菌ノ證明ト共ト、殊ニ膿尿ノ證明ヲ必要トスル。

此研究ノ主ナル意義ハ、結核症ノ場合ノ細菌血ノ證明ニ存スル。即チ尿中ニ結核菌ガ證明サレル場合、菌ハ唯血液カラ出ルノデアアル。然ルニ著者等ノ實驗テハ、Löwensteinノ方法テハ血液中ノ結核菌ノ證明ハ出來ナカツタガ、尿中ニ於テ之ガ證明サレタ。之ハ血液検査ハ回数ガ少ナク、而モ少量ノ血液シカ検査サレナイ。之ニ反シ尿テハ1日中或ハ月餘ニ互ル尿ヲ、一滴モ餘サズニ検査スル事が出來ルカラデアアル。

結核症ニ於ケル菌血ヲ證明スルニ、間接ニ細菌尿ヲ検査スル方が直接ノ血液ノ検査ヨリモ效果ガアル。

又臨牀的ニ意義アル點ハ、結核症ガ全身ニ血行性播種ヲ起シタカドウカラ定メル根據ヲ強メル事が出來ル

コトデアル。

(中田抄)

結核症ニ於ケル「レントゲン」透視ニ就テ

Arnold Engelhard und Haus Sielmann; Über Röntgendurchlenchtung bei Lungentuberkulose.

著者等ハ系統的ニ透視ト撮影トヲ比較シ、肺結核症ノ透視像ヲ研究シタ。此研究テ透視法ガ我々ノ豫測シナカッタ缺點ノアルコトヲ見出シタ。結局肺臓ノ完全ナル「レントゲン」検査ヲスルニハ、透視ヲ撮影ニヨリテ調正スル事ノ出来ヌ所ハ別トシテ、從來ノ通り透視ト撮影トヲ行ハナケレバナラス。(中田抄)

開性結核患者ノ周圍ヲ如何ニ監視スベキヤ、即チ定期的「レントゲン」透視カ、果タ又國民ノ衛生教育カ。

H. Braeuning: Wie soll die Umgebung von Offentuberkulösen überwacht werden: terminmässige Durchlenchtungen oder gesundheitliche Volkserziehung?

Geissler ハ本誌ノ Bd. 63, H. 3. 及ビ Prakt. Tbk. bl. 1931, H. 2 ノ論文中テ、著者ノ提案即チ開性結核患者ノ周圍ノ人々ヲ期間ヲ定メテ、「レントゲン」線テ検査スレバ、肺結核症罹患ヲ適時ニ見出スコトモ出来ルト云フ提案ニ對シ反對シタ。

即チ Geissler ハ著者ノ此臨牀的豫想ハ間違ツテテトシ、又定期的透視ハ實際ニハ實行出来ナイノデ、又此方法ハ決シテ認ムベキ結果ヲ齎ラサヌト主張シテテ。Geissler ハ肺結核患者ノ 90% 以上ハ病氣ノ初メニ病苦ヲ持ツモノデアルガ、不注意ノタメニ醫者ヲ訪レル時ハ、既ニ遅レテシマウノデアルト主張シテテ。

著者ハ之ニ對シ意見ヲ述ベテ、肺結核患者ノ場合、最初ニ客觀的ニ證明サレル病現象ガ、初メノ病苦ヨリモ先キニ表ハレルカドウカ、又ドノ位長ク存スルモノカノ問題ハ、病氣ノ當初カラ觀察サレタ場合ニノミ、解決サレルノデアアル。夫故ニ我々ハ何時ヲ發病トスルカト云フ事ヲ一定セシバナラス。

Geissler ハ beginnend ト云フ意義ハ治療ヲ必要トスル時ト同意義ニ解釋セントシテテガ、此定義ハ一寸見ルト、成程ト而モ實用的ニ見ヘルガ、而シ Behandlungsbedürftigkeit トハ何ゾヤト云フ事ガ一致シナイ限リハ通用シナイコトデアアル。

「レントゲン」像テ通常ノ肺ニ、初メテ初期ノ結核性變化が見ヘタトキ、或ハ打診、聽診、血液像、赤血球沈降速度或ハ體温ガ異常デアツテモ、靜止結核性變化ガ

悪化セルコトガ解ツタトキ直グ治療ノ必要ヲ認メルノデアアル。然シ此場合治療ハ必ズシモ、煩雜ナ規準ニヨツテ爲サナクモ、過勞ヤ不衛生ナ生活ヲ或ル程度マテ避ケルカ、又ハ患者ガ短イ期間ヲ隔イテ醫者ノ診察ヲ受ケレバ足リルノデアアル。夫故ニ beginnend トハ「レントゲン」所見テ證明サレル悪化ト定義スルノガ適當デアアル。夫故ニ結核罹患或ハ再發ノ始マリハ、健康ノトキ「レントゲン」寫眞ヲ撮ツテ置イタ病人ノ場合ニ定メラレル。即チ正常ノトキノ所見或ハ靜止ノ病竈ノ寫眞ト、後ニ撮ツタ寫眞ト對比シテ、今迄健康ダツタ場合或ハ靜止ノ個所ニ病變ガ生ジタ事ガ解ルノデアアル。病變ノ範圍ガ僅デアアルカラ beginnend ダトハ云ヘス。又病竈ノ古サヲ教ヘテモ吳レナイ。何ントナレバ範圍ノ僅カナ病變デハ、ソレガ擴ガツタ初マリデアアルカ、或ハ既ニ擴ガツタ病氣ノ終リデアアルカヲ知ルコトガ出来ヌカラデアアル。

Geissler ハ著者ノ定義ハ誤リデアルト異議ヲ唱ヘテル。即チ屢々主觀的病苦ガ「レントゲン」像ノ最初ノ變化ヨリモ、先キニアラハレルト云フテル。之ハ理論的ニハ左様ナ事モ有り得ルダロウガ、實際ニハ結核症ニ非ザルモノガ、結核ダトシテ取扱ハレル事ガ澤山アル。何ントナレバ結核ノ初メニ顯レル病苦ト云フモノハ、結核症テナイ人々ニモ頻繁ニアラハレル。

Geissler ハ病苦ガアツタラ直グ自ラ進ンテ醫者ニ來ルナラバ、開性結核患者ノ周圍テ結核罹患ノ初期ヲ見出スコトガ出来ルト考ヘテル。然シ此方法ハ、結核症ガ他ノ多クノ病氣ト同様ニ、明確ニ知覺サレナイ形テ初マル事ガアルカラ、總テノ初期結核患者ニ、目的ガ達セラレルワケテナイ。(中田抄)

定期的結核患者周圍検査ノ問題ニ就テ、並ニ Thüringen ノ傳染病規則ノ意義ニ對スル補遺及ビ本誌 Bd. 36, H. 3/4. S. 161 ニ掲載サレタル Geissler ノ論文ニ對スル批評

J. E. Kayser-Petersen: Zur Frage der terminmässigen Umgebungsuntersuchungen. Zugleich ein Beitrag zur Bedeutung des Thüringischen Seuchengesetzes und Bemerkungen zu Geisslers Veröffentlichung in dieser Zeitschrift Bd. 63, H. 3/4, S. 161.

初メニ著者ガ Jena テ行ツタ定期的結核患者周圍検査ノ經驗ヲ述ベテル。之ハ 1923 年カラ始メタモノテ特ニ系統立ツテ行ツタモノテナク、又 Braeuning ヤ其發表ニアル方法ヲ未ダ知ラナイ時ニ行ツタモノテ

アル。其成績ニヨルト、年ト共ニ閉塞性結核患者ノ周圍人ノ検査ヲ受ケタ數ノ百分率が増加シタト共ニ、傳染力ノアル患者ノ率が減リ、又閉塞性結核症ノ率が増加シテル事ハ注目ニ値スル。

傳染力アル患者ノ率が増減シタ事ハ、早期ニ病氣ヲ捕捉シタ顯著ナル結果デ、又閉塞性結核症ノ先驅デアルトコロノ閉塞期ヲ見出サチバナラストスル Braeuningノ提案ノ實現デアアル。閉塞性結核症ノ率が多クナツタノハ、此處置ノ當然ノ結果デ、周圍ノ總テノ人ニ徹底的ニ「レントゲン」寫眞ノ撮影ヲ行ツタコトニ因ルデアアル。而テ1931年ニ最も高キ數ヲ得タノハ、Thüringenノ傳染病規則ノ御蔭ニ依ルデアアル。此時ノ閉塞性結核患者周圍ノ人々ノ定期的検査ハ、傳染病規則條文中ノ調査ニヨルノテ、近接者ノ病苦ノ訴ヘガアル折ニ、本省カラ此検査ノ目的ノ正シイ事ヲ説明シテヤル。此調査ノ結果カラシテ、斯ル仕事ハ單ナル申合セテ目的ヲ達スル事ノ出來ヌ所テハ、懇切ナル手紙ヲ傳染病規則ヲ説明シテヤリ、ソレテモ目的ヲ達セヌ場合ハ官廳流テ呼び出シテ、根氣ヨク傳染病規則ヲ履行サセル。ドウシテモ服從セヌ場合ニ初メテ官權ノ威力ヲ行使スル。

Karlsruheノ報告ガ示シタ定期的検査ノ失敗ハ、稀ニ見ル例デアツテ、一般ニ他所テハ此重要ナル仕事ハ充分ニ進行シテル。夫故ニ早計ニ落膽シテ之ヲ中止スル動機トハナラナイ。強制法ノ利用ハ傳染病豫防ノ場合ニ、絶對ニ必要ナモノデアアル。近接者ノ進言及ビ病苦ノタメニ自ら進テ届出アル人ダケニ検査ヲ行フノテハ、目的ヲ達スルコトハ出來ヌ。

此周圍検査ノ成功ニ對シテハ、適當ナ診察時間及ビ出來ルダケ「レントゲン」撮影費用ヲ安價ニスルコトガ大切デアアル。(中田抄)

結核専門外雜誌

「ヴィガントール」飼養ニヨル脈管及内臓ノ病變ニ就テ

鈴木順彬、(京都醫學雜誌第13卷第11號)

著者ハ「ヴィガントール」ノ可ナリ大量ヲ三群ノ家兎ニ反覆投與シタル後其動脈、内臓血管及内臓ノ變化ヲ組織學的ニ検索シ生前ハ臨牀の所見殊ニ體重ノ増減ニ注意シタ。各群トモ5匹宛テ各々2匹ノ對照ヲ置イタ。第一、第二群ハ成熟家兎、第三群ハ幼若家兎テ季節ハ第一、第三群ハ夏、第二群ハ秋ヨリ冬ニカケテ

實驗シタ。血管ノ變化ハ主ニ中膜殊ニソノ $1/2$ 乃至 $1/3$ ノ部ニ著名テ大動脈テハ中膜壞死ト之ニ續發スル動脈壁ノ瘤狀陷沒乃至瘤狀擴張ヲ主要ナルモノトシタガ内臓血管テハ中膜壞死ハ一般ニ前者ヨリ少ナクムシロ内臓肥厚ト之ニ續發スル内臓ノ狹窄乃至閉塞ヲ主要ナルモノトシタ。ソシテコノ差異ノ生ズル所以ハ血管壁ノ厚サ並ビニ彈力型筋肉型ノ別及血壓ノ影響等ニヨリ生ズルモノト考ヘタ。蓋シ血壓ノ影響大ナル程此等ノ變化ガ著名テアツタカラデアアル。内臓ニ於ケル病變ハ自家血管閉塞ニヨル二次的ノモノト「ヴィガントール」ノ直接作用ニヨルモノトニ區別セラル。而シテ各臟器ノ實質變性ハ實質細胞並ビニ支柱組織ノ變性ニヨルモノテ前者テハ主トシテ細胞原形質内ニ變性顆粒ノ出現乃至空胞變性ヲ來シ後者テハ主トシテ退行變性ヲ招致シ脂肪化ノ出現ナクシテ、其變化ノ高度ナ場合ハ壞死性變化ニ移行スルヲ見タ。「ヴィガントール」ヲ比較的長期間與ヘタモノ、肝臓内テ偶々骨髓外造血現象ヲ確メ之ヲ局所及全身貧血ニヨルモノトシテ、内臓變化中脾腎ニ於テ最も高度テ心、肝ハ之ニ次ギ肺ニ於テ最も輕度デアツタ。體重増減並ビニ臨牀徵候ハ其血管及内臓病變ト必ズシモ平衡シナイ。年齢的關係テハ成熟家兎ハ血管ノ變化ガ主ナルニ反シ幼若家兎テハ血管變化ハ少ナク内臓ノ病變ハ高度デアツタ。又季節ノ影響ハ成熟家兎テハ見ラレナカッタガ幼若家兎ニ明カニ實證セレタ。(馬場抄)

○ 胸膜浸出液中ヨリノ結核菌培養ニ就テ

大鳥直美、鈴木立春、(東北醫學會雜誌第16卷第1册昭和8年8月)

著者等ハ銀杏培養基ヲ用ヒ熊谷教授ノ提案ニヨル菲薄纖維素膜ヲ以テスル結核菌附着洗滌方法ニヨリ特發性ノモノ及人工氣胸性ノ浸出液ノ結核菌ノ培養試験ヲ試ミ、其ノ陽性率ガ浸出液ノ性狀ニ著シク影響セラレル事ヲ特ニ高張シテキル。比重1019以下蛋白含有量4.5%以下リバルタ氏反應弱陽性ノモノテハ大多數ニ於テ結核菌檢出ハ不可能デアツタ。又同一患者テソノ經過中ニ陽性ノ事ト陰性ノ事トアツタガ浸出液ノ性狀モ之ト平衡シテ變化シテキタ。特發性ノモノテハ24例中17例ヲ人工氣胸性ノモノテハ13例中11例ニ陽性テ顯微鏡のニハ28例中只1例ニ陽性デアツタ。銀杏基養基トホーン氏培養基トノ比較試験テハ前者ハ80%後者ハ52.2%ニ陽性デアツタ。聚落ノ發育ハ3週間前後ガ最も多ク培養陰性ノ判定ニハ少

クトモ10週間ノ觀察ヲナシタ。特發性肋膜炎患者中ニハ肺ニ早期浸潤ヤ血行撒布等ノミセラレタモノモアツタガ外傷性肺炎性ノモノモアツタ。後ノ2者ハ共ニ陰性デアツタ。(馬場抄)

肺結核患者ノ減鹽食療法(尿分析成績)

生山昌敏、蜂山直彦(岡山醫學會雜誌第45年第8號、(第523號))

氏等ハ Sauerbruch, Herrmannsdorfer, Gerson 氏等ガ規定セシ總テノ條件ヲ完備シタル食餌ヲ給與シタルモノテ1日間ニ於ケル食餌ノ營養價ハ略ホ蛋白質95—150g 脂肪100—150g 含水炭素180—250g ヲ有シ總「カロリー」2100—2800ニ達シ、「ヴ」タミン」A, B, C ヲ含有シ食鹽含有量ハ2—3gニ過ギザリシモノナリ。而テ同氏等ハ

1. 7例ノ肺結核患者ニ就テ減鹽食療法ヲ實施シテ患者ノ體重

尿量

尿PH(Hellige 製比色計ニテ1日間ノ全尿量ニ就テ)

尿中總窒素(Kjadal 氏法)

尿中「アムモニヤ」(Köüger-Reich 氏法)

食鹽(Volhard 氏法)

「カリウム」及ビ「カルシウム」(Krämer u. Tischnall 氏法)

磷酸(Bell Doisy 氏法)等ノ分析ヲ行ヒ

喀痰中ノ蛋白量(Logeubein 氏法)

結核菌ハ Gaffky 氏表ニヨリ、併セテ尿中「チアツオ」、「ウロクロモーゲン」、「ウロピリン」及ビ「ウロピリノーゲン」ノ諸反應ヲ檢シ尙ホ其中數例ニ就テノ喀痰ノ性状ヲ精査セリ。

2. 夫等ノ成績ニ依レバ體重及ビ窒素代謝ニ就キ比較的良好ナル結果ヲ見タルモノ4例、著シキ變化ナキモノ2例、却ツテ増悪セルモノ1例ナリ。尿中食鹽量ハ何レモ著明ニ減少ヲ觀タルモ尿PH, 尿中「アムモニヤ」量並ニ「カルシウム」、「カルシウム」及ビ磷酸ノ各鹽物質代謝ニ就テハ變化ヲ認メザリキ。

3. 尿中「チアツオ」、「ウロクロモーゲン」、「ウロピ

リン」及ビ「ウロピリノーゲン」反應ハ屢々本食餌療法中ニ減弱又ハ消失ヲ來ス事アルベシ。

4. 氏等ハ以上ノ成績ヨリ減鹽食餌ハ Sauerbruch 氏等ノ言フガ如キ強キ酸性食餌ニ非ラザルト共ニ氏等ハ想定セン如キ效果ヲ期待シ得ザルモノト信ズ。從ツテ在來ノ營養療法ニ比シ特ニ優秀ナル食餌療法トハ之レヲ認メ難シ。

ト結論シテ居ル。

生理的食鹽水「クアッデル」ノ吸收時間ヨリ見タル

肺結核患者ノ水分代謝障礙ニ就テ

橋本春雄、青木耕一(東京醫學會雜誌第47、第7號)

同氏等ハ肺結核患者45例ニ就テ水分代謝障礙ヲ生理的食鹽水「クアッデル」 $\cdot\cdot\cdot 0.1\text{cc}$ ノ生理的食鹽水ヲ前脾屈曲面ノ皮内ニ注射シテ生ズル「クアッデル」 $\cdot\cdot\cdot$ ノ吸收時間ヲ以テ檢シ、結核ガ急性ニシテ進行性ナル程水分滯留ノ傾向増大シテ「クアッデル」ノ吸收時間ハ短縮シ、結核ガ輕快シ、停止性ノモノ程水分滯留ノ傾向減少シテ「クアッデル」ノ吸收時間ハ延長スル事ヲ實驗セリ。更ニ「クアッデル」ノ吸收時間ノ正常範圍内ニアル者及ビ短縮セル者トヲ群ニ分チ各々ニツキテ水及ビ食鹽排泄試驗ヲ行ヒ、前者ニ於テハ排泄正常ニシテ水分滯留傾向ナク、後者ニ於テハ著明ナル水分滯留傾向アルヲ確證セリ。

而テ同氏事ハ同氏等ノ實驗成績ヨリシテ「余等ノ實驗成績ハ Hans Stein 氏ノ肺結核患者ニ於ケル生理的食鹽水「クアッデル」試驗ト全ク反對ノ事實ニシテ氏ノ誤謬ガ生理的食鹽水「クアッデル」ノ吸收時間が組織ニ水分過剩蓄積アル程延長シ、水分缺乏アル程短縮ストノ點ヨリ出發セルヲ指摘セリ。」ト言ツテ居ル。

而テ肺結核患者ニ於テ病機ガ進行性、惡性ナル程水分滯留ノ傾向増大シテ生理的食鹽水「クアッデル」ノ吸收時間ハ短縮シ、病機ガ輕快停止スル程水分滯留傾向ハ減少シテ「クアッデル」ノ吸收時間ハ短縮シ、良好ノ經過ヲ取ル程延長スト言ヒ得ベク、此ノ「クアッデル」試驗ガ肺結核ノ病機豫後ノ測定上昇モ簡單ニシテ價値アル方法ノ一ナル事ヲ述ベリ。